

戦後開拓地のライフヒストリー（4）

—青森県鱒ヶ沢町山田野地区における女性たちの地域性と共同性—

A Life History approach to Postwar Reclamation（4）

Locality and Cooperation of Women in Yamadano clearance, Ajigasawa, Aomori

高瀬 雅 弘*

Masahiro TAKASE*

要 旨

本稿は、自然村とは異なる原理で構成された地域社会としての戦後開拓地において、女性たちがそこでの地域性や共同性をどのようにして形成していったのかを、聞き取り調査（ライフヒストリーインタビュー）に基づいて考察したものである。本稿では、地域性や共同性の基盤として、開拓の経験や記憶を位置づける。そのうえで、まず女性たちにおいて共有・継承されているものとしての、第一世代が伝える開拓の記憶の内容と、第二世代における受け止めに明らかにする。次に、記憶の継承にみられる女性の視点のもつ特徴について考察する。そして記憶の継承の仕方、ならびに継承の場となったものの意味について検討する。ここから明らかになるのは、多様な背景を持つ人々からなるひとつの戦後開拓地において、女性たちによる記憶の共有と継承、さらにはそれを支える場の存在によって、地域性や共同性が形成され、維持されてきた歴史的過程の一端である。

キーワード：戦後開拓 世代 地域性 共同性 女性 学校

1. はじめに

（1）関心の所在

青森県鱒ヶ沢町山田野地区の一带は、毎年5月になると菜の花で黄色く染め抜かれる。1990年代になってから土地の連作障害を避けるために開始されたもので、近年映画のロケにも使用されたこともあり、観光客も多く訪れる。また毎年3月には、地域の人々を中心に味噌作りが行われるなど、地域性を活かしたグリーンツーリズムの取り組みも行われている。かつて陸軍の演習場として使用され、戦後には引き揚げ者・戦災罹災者などの人々によって開拓されたこの土地は、その後の人の出入りこそあれど、今もなお地域性と共同性を保ち続けている。それは多くの人々の努力のたまものであるといえるが、とりわけ重要だと思われるのが、女性たちのまとまりである。ここには世代や出自を超えた形でのしっかりとした結びつきがある。山田野を訪れるたびに感じる、この地域の特徴である。では、そうした地域性や共同性の基盤となって

いるのは何であるのか。本稿は、その要因を戦後開拓という背景に求め、そこでの生きられた歴史のなかに探ろうとする試みである。

1945年11月に策定された「緊急開拓事業実施要領」に始まり、1975年に開拓農政の一般農政への吸収によって政策・制度的には終焉を迎える戦後開拓地は、自然村とは異なる原理によって構成された地域社会である。入植者たちは生きていくための生産基盤とともに、生活の場としての地域社会も新たに形作っていかねばならなかった。政策的には「一般」の農村となった後も、そこで生活する人々の意識までが「一般」農村のそれと同一になったわけではなく、「特異」な農村としてのアイデンティティは継承され、存続している。では戦後開拓地において創られ、維持・継承されてきた地域性や共同性とはいかなるものであったのか。この問いについて考察するうえで、本稿では大きく2つの視点と問いを設定する。

ひとつは開拓の記憶の継承という視点である。地域社会において、開拓の記憶は人々にとっての共有物で

*弘前大学教育学部社会科教育講座

Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Hirosaki University

ある。そうした共有物としての記憶は、地域社会にとっていかなる意味を持っていたのか。またそこで継承されるものとはどのような内容を持ち、そしてどのように継承されたのかが問われることになる。

もうひとつは女性という視点である。戦後開拓地における共同体のあり方をめぐる研究は、主として男性を主なる対象に据えてきた。果たして女性たちの地域性や共同性の構築の仕方は、男性たちのそれと同様であったのか。もし異なるとしたら、開拓地の地域性や共同性とどのように関わり、いかなるものを形成していったのかについて問う必要が生じる。

(2) 先行研究の知見と分析課題

近年、戦後開拓に関する成果が蓄積されるなかで、満州農業移民および満州開拓団を母体とする戦後開拓農協を対象に、早くから地域社会としての戦後開拓地の特性に着目し、社会学的な共同体論に基づく分析を行った蘭信三は、2つの分析視角を提示している。

ひとつは開拓村落研究である。開拓村落は、第一に開拓村落がもつ、自然村とは異なる「生得的機縁による集団ではなく獲得的機縁によってあらたに形成された集団で、従来からの村落の伝統や慣習などから自由である、という点」¹、第二に「集団入植の開拓村は母村の伝統すなわち社会構造や文化的背景の影響からのがれられないという点」²に特徴づけられる。

もうひとつの視角は共同体論である。蘭は開拓村落を「選択的」共同体、すなわち「地域の共同体を、『自然に与えられた』、個人に『所与』なものとしてだけ考えるのではなく、個人の主体的『選択』にもとづいて形成された共同体」³として捉え、うえて、「共有者に内在化し、個人の行動に規範性を持つ」ような共有集団としてのシンボル共有体概念にも注目して⁴、共同性ないし“きずな”を手がかりに、集落の形成（再入職）から、地域の解体（開拓農協の解散）までの過程を描いている。

この2つの視点と関わる形の事例研究は、地理学や農業史の領域においても進められ、地域における経営集団の組織化、さらにはアクターネットワーク論やリーダーシップのありようから地域社会としての戦後開拓地の特性が分析されてきた⁵。また、旧満州からの引き揚げ者を中心とした、長野県出身の同世代の若者たちからなる岩手上郷分村開拓地の事例分析は、地域社会の形成過程におけるリーダーとフォロワーの関係性について考察している⁶。

こうした先行研究はいずれも重要な知見を提供して

いるが、依然として未開拓の領域が残されている。

ひとつは記憶の継承である⁷。蘭の研究において示されたようなシンボル共有体という概念は、生産における共同性や、戦後開拓地がもつ「前史」（たとえば満州・樺太での開拓や引き揚げ）に加えて、入植以降の時間のなかで蓄積されてきた新たな記憶＝「歴史」にまで拡張することが可能である。その際には、継承される記憶の内容と、継承の方法やそれを支える場のあり方が考察すべき課題となる。そこには必然的に「世代」という視点も含まれることになる。

もうひとつは女性の視点である。これまでの戦後開拓研究が、開拓営農の展開を分析の中心としていたために、その視角は必然的に男性に向くことになった。したがって開拓地における女性の存在や彼女たちのライフコースが研究の対象となることはほとんどなかった。近年、戦後開拓地を包括的に分析した森武磨らの研究⁸や、岩手上郷分村開拓地における第二世代の女性のライフコースを分析した事例研究⁹が蓄積されつつあるものの、地域性や共同性の形成にみられるジェンダーによる差異といった点は、現時点において十分に考察されているとはいえない。

そこで本稿では、以下のような分析課題を設定する。

第一に、戦後開拓地の女性たちにおいて共有される地域性や共同性がいかにして形作られたのかについて考察する。ここでは世代を越えて共有される地域性や共同性の基盤としての記憶に注目する。そして第一世代によってそのままに生きられた経験、また第二世代には体験とともに見る・聞くことを通じて受け止められた経験の内容を捉える。こうした作業を通じて、共有されるシンボルのありようを明らかにしたい。

第二に、女性たちが形成する地域性や共同性の特性を、男性たちのそれと対比させる形で捉える。その背景には、妻や母親といった役割があるが、先行研究で分析された、男性を中心として制度化された共同性—その象徴が開拓農協である—とは異なった形での地域性や共同性のあり方について考察する。

これら2つの課題に加え、第三に、記憶や体験の共有の仕方と、共有の場の意味を明らかにする。記憶の継承については、家族のなかでの語り伝えや自叙伝、手記といった方法が想起されるが、家族を越えた「集合的記憶」の蓄積と継承の方法もまた、シンボル共有体のありようを分析するうえで検討される必要がある。そしてそうした記憶の継承、さらには開拓地における新たな記憶の創出と共有の場として、地域社会に

おける学校の存在意義について考察する。

2. 対象と方法

（１）事例の概要

青森県岩木山麓、鱈ヶ沢町（旧鳴沢村）山田野地区は、1890年代に陸軍の演習地として利用が開始され、1909年ごろには演習廠舎が建設され、約5000haにも及ぶ北東北最大の演習地として整備された土地の一部に当たる。

山田野演習場は、戦争が末期状態に陥った時点で徐々に演習場としての機能を失いつつあり、広大な土地の一部は食糧増産隊の訓練場所となっていた。食糧増産隊は、「食糧増産急応対策要綱」（1943年6月）により創設が定められた組織で、都道府県単位で17歳以上25歳までの男子によって編成されたもの¹⁰であり、山田野陸軍廠舎は青森県における1944年度甲種増産隊¹¹の基礎訓練場所となった。記録によれば、幹部42名、隊員660名の計702名が1944年4月11日から5月10日まで訓練を行い、鳴沢村内の荒地9町歩を開墾したとされる。以後解隊となる45年1月末日まで、190日間72箇所での作業を実施した¹²。また同年夏には、「農兵隊」と呼ばれる朝鮮人の兵隊が演習場の一部を耕作して、じゃがいも、かぼちゃ、麦を作っている様子が目撃されている¹³。

終戦後はただちに入植が開始されたとみられ、45年9月4日付の新聞には、早くも開墾の様子を伝える記事が掲載されている¹⁴。確かに当地は地元民が採草地（秣場）として利用していたが、農耕地としてはかな

り厳しい土地条件であった。やがて元軍人と引き揚げ者による入植が進められた。計画では、入植予定戸数は115戸であったとされる¹⁵。

1945年12月29日付の新聞では、山田野で30戸の入植者が開墾を開始したことが紹介されている¹⁶。旧山田野演習場の開拓は、農地開発営団が事業主体となり、地区総面積1100町歩のうち300町歩が開発計画面積とされた。入植計画戸数は100戸、1947年3月末の入植戸数は95戸となっていた¹⁷。翌48年3月末には、入植戸数は100戸、既開墾面積は115町歩、住宅数は63を数えるに至っている¹⁸。

このような形で成立した山田野開拓地は、その後離農者・転出者が相次ぎ、現住戸数は約30戸（土地と家屋のみを所有するケースも含む）となっている。

（２）調査方法

調査の実施に当たっては、『青森県戦後開拓史』『鱈ヶ沢町史』等の文献資料を参照したうえで、2012年9月に集団聞き取りの形でライフヒストリーインタビューを実施した。加えて一部の対象者については2012年12月および2013年1月に追加のインタビューを行った。調査内容は、基本属性（氏名、出生年、現在の家族構成）、生育環境（出生地、生業（家業）、きょうだい数、出生順位）、教育経歴、職業経歴、生殖家族経歴（夫の職業、結婚年齢、結婚のきっかけ、子ども数、現在の子どもの居住地）、子どもの教育、地域移動経歴、地域と開拓（入植の経緯、周囲の環境、開拓農業の苦勞）、現在の生活（介護、社会・地域活動）、人生を振り返っての評価、の10項目である。

表1 対象者のプロフィール

事例	基本属性				生育環境			教育経歴	職業経歴	生殖家族経歴					
	性別	生年	西暦	世代	出生地	生業	きょうだい数(男,女)	出生順位	学歴	初職以降の職業	夫の職業	結婚年齢	子ども数(男,女)	子どもとの同居	後継者の存在
A	女	大正11	1922	1	八戸市	会社員	3 (1,2)	1	高等女学校	銀行(5年)→退職(結婚)→農業	職業軍人→農業	23	3 (2,1)	○	○
B	女	大正10	1921	1	木造町(現つがる市)	農業(主に米)	不明		実科女学校(裁縫科)	看護婦(助産師)(3年)→退職(結婚)→農業	飛行場勤務→農業・酪農	21	4 (2,2)		
C	女	大正14	1925	1	樺太	漁業	2 (1,1)	1	高等小学校	家事手伝い→勤労奉仕(女子青年団)→結婚→農業	軍人→農業・酪農	22	2 (0,2*)	○	
D	女	昭和18	1943	2	北海道	漁業	9 (1,8)	4	高等学校(私立)	会社員(13年)→結婚→事務職→農業→自営業→農業	会社員→農業	25	1 (0,1)		
E	女	昭和16	1941	2	深浦町	農業・製材業	7 (4,3)	4	高等学校(公立)	会社員(2年)→製材所手伝い→結婚→農業	農業・酪農	25	2 (1,1)		
F	女	昭和4	1929	1	木造町(現つがる市)	農業(主に米)	不明		高等小学校	家事手伝い(りんご栽培)(10年)→結婚→農業	農業・酪農	22	3 (2,1)	○	
G	女	昭和25	1950	2	木造町(現つがる市)	公務員	不明		高等学校(公立)	商店(5年)→家事手伝い・和裁・洋裁→結婚→農業	農業・酪農	26	2 (1,1)		

※いずれも養女で、うち1人はD氏。またC氏とD氏、F氏とG氏はもともと血縁関係にある。

(3) 対象者

ライフヒストリーインタビューの対象者は、現在山田野地区に居住する女性7名である。うち4名が開拓第一世代であり、3名は第二世代（1名は第一世代の子ども）である。なお第一世代の4名のうち2名については、その夫にもインタビューを実施している¹⁹。

表1は、対象者の経歴をまとめたものである。ここから読み取れるライフコースの特徴を整理しておくことにしよう。

対象者のうち、第一世代の4名は1920年代に生まれた人々であり、第二世代の3名は1940・50年代生まれとなっている。第二世代のうちD氏はC氏の養女であり、親子関係にある。それ以外の2名はいずれも第二世代の男性のところへ嫁いできている。出生地については、第一世代のうちC氏が両親が渡っていた樺太生まれ、A氏が八戸市生まれであり、それ以外の2名は鱒ヶ沢町と近接する木造町（現つがる市）である。第二世代の3名については、1名が北海道、2名はそれぞれ木造町、鱒ヶ沢町と鉄道で結ばれている深浦町の出身である。

生育環境をみると、生業（家業）が農業であるのは7名中3名である。それ以外の2名は漁業、1名が会社員、もう1名が公務員となっており、農業出身者が必ずしも多いわけではない。またいずれも開拓農家の出身でもない。

教育経歴は、第一世代のうち2名が中等学校（高等女学校と実科女学校）、2名が高等小学校卒業となっており、第二世代は全員高等学校を卒業している。なお第二世代の3名はいずれも普通科の出身となっている。

職業経歴をみると、初職が農業というケースは自家のりんご栽培の手伝いをしたF氏のみで、家事手伝いと勤労奉仕に従事したC氏とを除く5人は、学校卒業後に雇用労働者となっている。5人のうち3人は結婚や出産を機に初職を退職しており、その後は家業の農業・酪農に従事するか、別の仕事に就いている。それ以外には結婚前に転職を経験したケース、結婚後も就業を続けたケースがある。文字通りの専業主婦はいない。

夫の職業は、結婚した時点では農業・酪農が7人中6人を占める。ただし第一世代については、入植前に農業の経験を有していたのは4人中1人にすぎず、それ以外の3人はほぼ素人であった。第二世代については、3人中2人が開拓二世である。もう1名は会社員であったが、のちに山田野での農業にも従事している

（その後転出）。

結婚年齢は第一世代が20代前半、第二世代が20代半ばとなっている。ただし対象者の出生年には多少のばらつきがあり（第一世代で8歳、第二世代で9歳の年齢幅がある）、必ずしも同年代であるというわけではない。したがって、当然のこととはいえ、7人の対象者のライフコースには、重なりあう要素とともに世代・年代間の相違が表れていることが予想される²⁰。

それでは以上のような背景をもつ女性たちは、開拓地とそこでの生活をどのように捉え、そのうえでいかにして相互の関係性を構築してきたのか。以下では個々の事例に即して考察する。

3. 女性の目からみた開拓地

戦後開拓地においては、その性格上第一世代のほとんどがその土地にゆかりのない人々である。一方、第二世代の女性については、子どものころからこの地で育ったD氏、同じく幼少時からたびたびこの地の親族のもとを訪れていたG氏、そして他の土地から嫁いできたE氏と、関わり方はそれぞれ異なっている。では、彼女たちにとって開拓地とはどのような場所であったのか。第一世代と第二世代それぞれの視点から、前者については入植の経緯と開拓営農における苦難、後者については子どもの視点ないし外からやってきた者としてみた開拓地の環境についてみていくことにしたい。

(1) 入植の経緯

4人の第一世代の女性たちは、それぞれ次のような事情のもとに入植した。

① A氏

八戸市出身のA氏は、1945年8月、終戦を三沢市で迎えた。当時陸軍将校であった夫と結婚したのは終戦の1週間前、その夫は米軍の上陸に備えて沿岸警備に当たっていた。終戦後、食糧増産のための入植に応募して、旧山田野演習場の土地が割り当てられ、同じく元陸軍将校とともに先発隊として入植した。当時の木造町長が夫の友人で、開拓に当たってはいろいろと便宜を計ってくれたという。

入植が開始された初期には、入植者たちはかつての兵舎に住んだ。そこから割り当てられた自分の土地まで歩いて通う「通い開墾」を行っていた。A氏は夫とともに演習廠舎内にあった「貴賓室」に入った。

A氏にはそれまで農業の経験はない。しかし心配する周囲をよそに、次のような気概でいたそうだ。

私は何とも（感じ）なかった。（女学校の時分から）満州に行くんだ、っていった。だから山田野くらいなんだ。

②B氏

木造町出身のB氏は、稲作農家に生まれた。実家は4町歩から5町歩ほどの耕作面積であった。高等小学校から裁縫専門の女学校へと進み、卒業後、五所川原の産婦人科病院で働いた。1941年4月にその病院の長男と結婚する。戦時中、夫は東京・立川の飛行場に勤めており、45年3月10日の東京大空襲で炎上する東京の姿を立川から遠望した。一足先に五所川原に疎開して、戦後に迎えた夫は、新聞で入植者募集の記事を目にする。そして入植を申し込んだ。

（夫は）私に相談もしないでここへ来たんだけど、入植を断られたんだって。医者の子はダメだって。それでも断られても、断られても、知り合いのつてでどうにか入ったの。私、知らないうちに決めてしまったの。親も知らなかったの。

③C氏

樺太出身のC氏は、高等小学校卒業後、実家で家事手伝いや女子青年団の勤労奉仕に従事していた。22歳のとき、北海道出身の夫と結婚した。夫は奈良県の軍隊にいた。「（樺太から）船に乗って、汽車に乗って、船に乗って、汽車に乗って、1週間かかってようやく奈良県に」着いた。終戦後、夫は残務整理のためしばらく奈良にとどまっていたが、C氏は夫の姉を頼って北海道に移った。そして迎えにきた夫とともに青森に移住する。1948年に入植。当初は現在住んでいる山田野ではなく、さらに4kmほど奥に入った大平野（おおだいの）という土地に入植した。入植者たちの住居となっていた旧兵舎から山田野までが4kmであるから、片道8kmの「通い開墾」をしたことになる。

元職業軍人であった夫は、次のような事情から開拓に応募した。

（実家には）樺太から兄たちが来て、一緒になって、国後から姉が来る。親戚の家にも引き揚げ者がいっぱいなわけ。3組も4組も。兄に迷惑かけられないからって、青森に来て、青森で広

報に載ったんだか新聞に載ったんだか、入植できるって。それで入りました。募集してあったんです。だから、みんなよりちょっと遅れて入りました。

④F氏

木造町出身のF氏は、尋常小学校2年生のときに父親を亡くし、母親が家を切り回していた。男きょうだいは兵隊に取られてしまい、早くから家（農家）の手伝いをしなければならなかった。高等小学校を卒業後は、秋田県大館市に嫁いだ姉のところに行って、10年ほどりんご作りをした。実家に戻ってから、すでに山田野に入植していた同じ木造町出身の夫と結婚した。

（夫は）木造の人の紹介で、兵隊に行って、決死隊に行って戻ってきて、また木造の人に紹介してもらって、ここ（山田野）に入った。（結婚した当時）開拓に入ってあったよな。一人で入植してあったよ、兵舎さ。覚えてるもの。

（２）開拓地の苦難

多くの戦後開拓地がそうであったように、山田野においても開拓当初の労苦はとりわけ第一世代のなかで広く共有されている。

山田野における開拓の困難さは、以下のような点に起因している。第一に、入植者の多くが農家出身者以外であるか、または農業の経験をほとんど持たなかった。第二に、演習場として兵隊たちが駆け回り、踏み固めた土地であったため、土の掘り起こしが困難であった。第三に、土壌は「開拓適地」とされながら、実際には「火山灰土壌の表土は膨軟、軽しょう、地形は複雑」²¹で、厳しい土地条件であった。第四に、住居は旧兵舎を利用したため、耕作地まで時間をかけての「通い開墾」となった。そして第五に、元軍人と樺太からの引き揚げ者など、多様な入植者からなる新たなコミュニティのなかでの協同性や合意形成が必要となった。

①A氏

父さん（夫）と2人で大豆蒔いて、2人の若い者が1年かかって大豆30キロ。あの30キロの袋1つ。いやいや。暮らすほども何にもできないですよ。だから八戸のわたしの父親、兵舎にたまに来るの。で、ぬか漬のイワシだとかなんとかって持ってきてくれたです。

A氏が夫と2人で苦勞した末に得た収穫は、ほんのわずかなものであった。そんな様子を見かねて、A氏の父親はA氏が実家に帰るたびに、そと現金を渡してくれたこともあったという。また、とにかく入植してしまえば食糧が手に入るだろうという期待は、甘い見通しでもあった。

②B氏

(夫は) やっぱりそのときに食糧、だから、自分で動いたら(働いたら) すぐ口に入ると思って(山田野に) 来たんじゃないですか。小豆も豆も、家から5合もらってきて、5合なくて半分やと採れたぐらいのもので、採れるはずない。みんな実家のお世話になってここまで来たの。親が生きてるから。(親やきょうだいが) だめだって抑えて、向こうでみんなやれるはずないってしゃべられたけど、一旦入ってしまえば、引き返せない。

しかも、B氏の夫はまったく農業の経験がない。ときには農家出身のB氏のほうが夫のできることを上回っていたことさえあった。

(夫は) のこ引きもやれないし。昔、みんなアカシヤの木を盗んで、兵舎のたくさんあったところに、誰だか持っていた木を、私、夜の夜中に、五所川原から1本持ってきた鋸で木を倒したの。朝早く起きてやらなきゃと思って、そこへ行ったら、もう取られてしまってきれいになくなって。みんなそのあたり、一人で自由に切るんだから。でもうちの旦那、鋸やれないから私やったの。まあ、情けないもんであったよ、本当に。柵も作れないし。「重いものは箸」で暮らした人だから、どうもならないっきゃ。

旧兵舎での生活は、食糧だけでなく物資にも事欠くありさまであった。B氏は兵隊が使った毛布を敷いたり、オーバーにしたりして寒さをしのいだという。

それでも親族の支援があるケースはまだ幸せだった。当初は山田野からさらに奥まった土地に入植したC氏は、そうした援助も受けられないなか、思うような収穫を得られずに苦闘する。

③C氏

畑を作るのに、兵舎から8kmも通って、肥料も

何もなくて、馬、牛のフンを拾って肥料にして畑を作った。平らになっているところをこうやって四角く起こして、草の生えているほうを返して、半返しして肥料にして、それに畑にして物を作って、小豆だの豆だの。それでソバ5俵ぐらい植えても3俵ぐらいしか採れない。小さくて手にかからないで、こぼれるものが多いのさ。手で集めて刈って、こんな豆、2粒か3粒しかなくて、みんな集められないわけ。だから、種を5俵蒔いても3俵ぐらいしか採れないの。原野を返して土にして、下にした草の根が肥料になるまでちょっとかかるわけさ。それで採れなかった。大根を蒔けば、下にもぐらないで葉っぱばかり。

収穫の少なさだけではない。厳しい生活環境もまた前途への不安を大きくした。

ここに入植して入ってから兵舎に随分いたんですよ、1年ぐらい。それから、自分でその奥に掘って建て小屋を建てたわけ。そこにいたの。冬に朝、起きたら、夜具の上に白い雪がいっぱい軒から入ってきて、涙が出て、こうやって暮らしているんだべがと思ったら、ただ泣かかって。

また、町へ出るのもひと苦勞だった。

今の鳴沢の駅のところに米の配給所があって、大平野から米の配給を取りに10kmぐらい歩いて、途中で2~3回休んで、親とご近所さんと自分の家の3軒(が開拓に)入っているとき、米の配給を背負って行った。一生忘れられない。

前述のように、山田野に入植した人々の多くは、農業に関してはほぼ素人であった。そうした人々が、農耕に適しているとはいえない土地を、朝晩長い道のりを歩いて耕作する。何より食糧が確保できるという期待と実態とは、大きく乖離していた。こうした初期の開拓の労苦は、口伝によって、またのちに触れる地域の学校を通して、次の世代へと受け継がれていく。

(3) 子どものみたく開拓地/嫁いできてみたく開拓地

第二世代の聞き取りの対象者のうち、2人は子どものころから山田野という土地に触れている。彼女たちは開拓に従事する第一世代の人々の姿をどのようにみていたのだろうか。また、もう1人は、山田野から離

れた土地から嫁いできた。彼女は初めて生活する環境や暮らしとどう向き合ったのか。

ここでは、直接的には第一世代の労苦を経験していない（ただし間近ではみている）人々からみた開拓地の姿を捉えてみたい。

①D氏

北海道石狩市出身のD氏は、3歳のときにC氏の夫の兄の家から養女にやってきた。8人きょうだい（もともとは9人だが1人は幼少時に亡くなっている）の4番目で、やがて5歳下の6番目の実の妹も同じく養女になった。そのころにはC氏の生活も安定し、家もバラック建てとはいえしっかりとした建物になっていた。中学校に進学する際、山田野を離れ、私立の学校の寮に入った。週末には実家に帰る生活だった。卒業後は関東で就職し、その後札幌で暮らした後、10年ほど前に再び山田野に戻ってきた。

子どものころ、遊ぶものも十分でない環境のなかで、D氏は元演習場ならではの遊びをみついていた。

私なんか小さいとき遊ぶのは、兵隊さんの銃の玉、缶詰の空いたのに鉛を入れて、火をやってそれを溶かして遊んだ。溶かして、こういう形作って、そこに入れば四角くなるじゃない？それとかひし形にしたやつにやればひし形になる。そういうのを鉛の溶けたやつで、母さんたち畑をやってるとき一人だから、誰も友達もいなくて、そうやって遊んでた。

幼少期にC氏と暮らしたのは3歳のときから小学校卒業までであったが、働く姿は強く印象に残っている。

ずっと奥の家（C氏が最初に入植した大平野）にいたときは、私はまだ学校に入る前だったけど、まだ（C氏が）22歳か23歳ぐらいのときに、お盆になったらキキョウとかオミナエシとか、ああいうのを山から採って、花束にして鱒ヶ沢まで背負って。それが4km、5kmでないじゃない、2里もあるんだもの、8kmでしょ。もっとあるよね。そこを背負って、川があって、橋がなくてさ、丸太1本あるだけ。それだって揺れるんだもの。落ちたことあるよね。流されたことがあったりさ。本当に苦労したと思う。

D氏は進学した後も、週末や休みの時期に帰ってきては、ソバ刈りや草取りなどを手伝った。子どものころの両親の姿についてはこのように回想している。

母さんは、あまりああせ、こうせといわない人なの。父親がとにかく厳しいから、女の人は余計な口出ししなくていい、みたいな。兵隊だからね。軍隊でずっと上だったんだろうし、母さんの言い分なんか通らないという感じだよ。厳しい人だ。厳しいといたって冷たいとかでないんだけどね。随分優しい。

父親は自らがなりたかった教師の夢をD氏に託していたという。そんな父親は54歳で急逝する。母親のC氏は46歳。以後はC氏が一人で農作業に従事した。

あれ（父親の死）は我が家にとっては一番の岐路だね。右左の分かれ道だったかもしれない。父さんが生きてれば、母さんはここまで苦労しなくて済んだろうし、父さん死んでから、母さん、畑をずっと一人でやってたから、機械も何もなくね。よくやったと思うわ。その頃は私は（山田野を）離れてたし。

②G氏

木造町出身のG氏は、F氏の親族（姪）に当たる。父親は公務員、母親は専業主婦という家庭で育ったが、子どものころからF氏を訪ねて山田野にはたびたび足を運んでいた。高校を卒業後、地元の商店に勤め、その後は結婚するまで和裁・洋裁、編み物、習い事をしていった。26歳のとき、山田野のF氏の近くの農家に嫁いだ。G氏にとっては慣れ親しんだ土地であった。

G氏が遊びに来ていたころ、F氏は大家族を食べさせるのに苦労していた。

米がないところで、苦労した。うどんを食べて。大人数であったものだから、10人以上であったから、うどん4束ぐらい晩に煮て食べて。大人数であったもので。（F氏）

その様子はG氏も記憶している。ただしそれはF氏の苦労を偲びつつも、楽しい思い出として残っている。

私が小学校のころ、Fさんのところに遊びに、木造からずっと汽車に乗って、鳴沢の駅から歩いて山田野まで来て、夏休み、春休み、冬休み、ずっとここに遊びに来てたんですよ、何が良かったか。それがいいんで今、ここにいるんだと思うんですけど、その当時、夏はジャガイモとカボチャを大きな鍋に入れて、それを煮たものをおやつに食べましたね。ご飯っていえば、お米が当時そんなにまだ採れてない時代なので、オカボという陸の、畑に植えたお米とか、水田とかそういうのがあまりまだ、あの当時あったのかな。よくうどんとかそういうのを食べたということなんです。家族も結局、おじいさん、おばあさん、自分（F氏）たち夫婦、旦那の妹とかもいたんですね。そこに私も邪魔するわけですから。

開拓当初の苦労は、子どものころに、さらには嫁いだから夫の父親から伝え聞いた。

入植当時は政府からお金を借りて生活費に充てるような、本当は農作業のためにそれを使わなきゃいけないんでしょうけれども、生活のために使ったということも。例えば、種として購入した小豆なんかも、それを種として蒔かずに食べてしまったという人もあったような話も聞いてました。結局、畑もやせて、半開墾という状態で種を蒔いても、植えたものよりも採れない状態。結局、食べざるを得ない状態。

③E氏

深浦町出身のE氏は、実家が農業と製材所を営んでいたこともあり、家族や使用人を含めて17人もの大所帯で育った。高校を卒業後、地元を離れて就職した。当時は地元で働くといっても、五所川原のデパートなど、ごく限られた就職先しかなかったため、同級生の多くは東京などに出て行った。25歳のとき、夫のもとに農作業の手伝いに来ていた人の紹介で結婚した。畑作で人手が足りないところ、近辺の農家の人たちが田植えやりんご栽培の合間をみて手伝いに来ることがあり、紹介してくれたのはそんな人のうちの一人だった。山田野に嫁いできたときの印象は「隣がすごく離れてること。家が離れてて、畑がすごく広くて、仕事するのに大変」というものだった。

E氏は第二世代の妻であり、第一世代の夫の両親の農業や酪農を手伝うことになった。夫の両親はもともと

と農業をしていたわけではない。だから「農業やったことないのに、よくこれほどの面積でやってきたな」と思っている。そうした入植者の苦労は、E氏の目には次のように映っていた。

なかには建石や小屋敷（いずれも隣接する集落）の村の次男あたりが入った人もなかにはいる。（山田野の第一世代の多くは）そういう人たちとはまた違う。そういう人たちは親からいづらか、2～3反でも財産分けでもらって入ったからそんなにあれだけど、ここは体一つで入ったものなところで、みんな自分たちで、大変であったびよん。とにかく、山田野って、あっちにいても聞いたことないもの。小屋敷とか建石という名前は聞いたことあっても、今と違って情報がなかったから、あの頃は何もなかったもの。山田野という名前も聞いたことない。私も学校に入ってる時、鳴沢というのは聞いたけど、山田野って聞いたことないもの。まずみんな、本当に大変な苦労したべにの。

このように、第二世代の人々においても第一世代の経験は広く共有されている。第二世代の人々においては、まだ第一世代の開拓は「歴史」にまではなっていない。子どものころに触れた、あるいはいづらかの時間差を置いて接した同時代の体験として記憶されている。そしてそのことが第二世代の人々の第一世代に対する畏敬の念の根幹をなしている。

同時に、男性における記憶の語りのなかに多くみられる農作業の労苦といったことは、もちろん女性においても語られてはいるものの、一方で家族（とりわけ母親）の姿や食事にまつわる思い出がより多く表出する。さらには次にみるような子育てといった点に焦点が集まっていく。

4. 地域における子育てと学校

第一世代と第二世代双方において語られる開拓初期の経験は、記憶の共有という形でもって人々をつなぐものとなっている。この場合の記憶は、ひとつには仕事に、もうひとつには生活にそれぞれ根ざしている。これらはいずれも記憶の共有にとって重要な側面であるといえるが、加えて山田野にはもうひとつ、人々の記憶のよすがとなるものがある。それは子育てに関する記憶であり、またその場となった学校である。

（１）山田野での子育て

対象者の女性たちには子どもに関する様々な思い出がある。しかし具体的に子育てに苦労したといった話はほとんど出ることにはなかった。それは単にラクができたというよりは、仕事の忙しさに子育てどころではなかった、というのが実情のようであった。

①E氏

仕事が忙しくて、全然投げっぱなし。ただ、野山を走って歩いたり、そうして育てました。鳴沢に保育所があって、児童館ですか、そこに息子が行ったら3日でやめました。「何でやめたの？」と聞いたら、「ああしたうるさいところに行きたくない」って。ここにいれば、一人で自由に遊び回っているのがいいらしいんですよ。

もっとも、子どもたちは自然に恵まれた環境のなかで伸び伸びと育っていたようである。ただ、地域から学校が離れていたために、通学は困難をともなった。通学をめぐるエピソードはたびたび語られている。

②C氏・D氏

C氏：学校に通うのに距離が遠いんだ、鳴沢の小学校まで。

D氏：鳴沢の小学校まで2kmあるからね。ご飯食べて行っているのに、私より2級ぐらい上の女の子がいたんだわ。ずるい子でさ、「ここでご飯食べて行こう」って。嫌だともいえなくて、一緒にご飯を食べて、それがみつかったんだよね。ああいうときはこっぴどく怒られた。ほんとにすっごい怒られた。

C氏：そういうのは本当に厳しいよ。徹底して座らせて、「わかった」ってするまでやる。今だば何てすることないけどな。大きくなってからは、あまりいわないな。小さいときは自分のあれだと思ってるはんでか、厳しくしつけた。

B氏によれば、「自転車も今のように普及しておらず、ほとんどの子どもたちが歩いて通っていた」とのことであった。子どもたちにとっては、長い通学路はときにいたずらや遊びをする場であり、一方親たちは過酷な通学を心配した。

③G氏

山田野分校ができたのが昭和29（1954）年でしょう。その当時は1年生から4年生までしか入れなかったんですよ。5年生、6年生は隣の集落の小屋敷という小学校まで歩いて通ったんです。でも、おじいちゃん（夫の父親）は、夫にはきょうだい3人いるんですけど、学校に通う姿をみて、例えば、雨の日は泥んこになってしまうわけです。ズボンの裾が泥だらけになって小学校まで通う。その往復の大変さを見て、冬はもちろん吹雪のなかとかで、ここに（6年生まで通える）分校を作ってほしいって陳情に青森とか県のほうとかいろいろ奔走したらしいです。そういう苦労を経て分校が建ったにもかかわらず、うちの旦那様は（年齢的に）ここに入れなかった。下の次男、三男はここに入ったんですけど、とにかく学校までの距離、通学するのが大変だったという話を聞いていました。

分校の設置と拡充は、子どもだけではなく、大人も含めた地域の人々の切なる願いであった。

（２）山田野分校の存在

1954年4月、山田野に町立鳴沢小学校山田野分校が開校した。上のG氏の話にもあるように、当初は1学年から4学年までが通う学校であった²²。2002年3月に鳴沢小学校に統合される形で閉校となるが、現在は山田野集会所として引き続き地区の住民に利用されている。名前こそ変わってはいるものの、内部には学校当時の写真が飾られ、教室も往時の雰囲気を残している。こうして今もなお大切にされている場としての学校の意味とはどのようなものであったのだろうか。

①E氏

（子どもに）勉強せいとはいったことないな。あのときの先生もよかったね。いい先生さめぐり会って。版画だの習字だの熱中してやったっきゃ。生徒も少なかったところで、生徒みんなにピアノを教えたり、やらせたりしたもんだ。ピアノを弾いたりさ、2人（の子ども）と学校でよくやった。

少人数での教育のよさは、対象者から異口同音に語られた²³。そのなかでもG氏はとりわけ強く深い思い入れを山田野分校に持っている。

②G氏

うちの子どもたちも、ここに入ること自体が希少価値というか、限られた人数じゃないですか。今しか経験できないよということはよくいったような記憶があります。

また、分校は地域のなかに閉じられているというよりもむしろ開かれてもいた。

いつ頃まで続いたのかな、分校研究会というのがあって、この辺、西（津軽）郡だけだったっけ、どうだったっけ、深浦町にあった松原分校とか、鶴田町にある共栄分校とか、車力の芦薈にも分校があったんですけど、そういうところに毎年回って歩いて、親たちが分校そのものをみて歩いて勉強してという分校研というのがあったんです。それもすごく分校にいてよかったことかなと。鱒ヶ沢でももうひとつ、松代分校、ずっと山の上にある、鱒ヶ沢に分校が2つあったわけですし、そういうところをお互いにみて歩いて、それぞれに名物先生がおられたりして。それもすごく分校にいて勉強になった、よかった点ですね。親と先生が勉強するんですね。

このように分校は親たちにとっての「学びの場」でもあり、また「地域コミュニティの中心」でもあった。

昔、分校がここにあって、うちの子どもたちがいたころは、まだ「学習発表会」ではなく「学芸会」というふうに、私たちもそうだったけど、「学芸会」と呼ばれてたんですよ。Aさんの父さん（元将校のA氏の夫のこと）が軍服を持ってたんですね。私はそれを借りて、ちょうど私と同じくらいのあれ（背丈）なので、それを借りて学芸会で、その当時は、私たち父兄もみんなが学芸会に参加するんです。子どもたちの人数が少ないので、子どもたちの出番ももちろん、何種類もいっぱいあるんですけど、子どもたちは大活躍をしなきゃいけない。その合間に、親たちも、器樂をやったり、演劇をやったり、踊りをやったりするんです。父兄だけでなく、おじいちゃん、おばあちゃんもみんなですね。運動会ももちろんそうです。私はAさんの父さんの軍服を借りて、学芸会、どういふあれだったかももう忘れたんですけど

ど、帽子をかぶって、ゲートルを巻いて、軍服を着て、こんなふうになった（演じた）記憶があります。

分校では、かつて子どもたちが地域のお年寄りを回って、開拓のときの様子を聞き書きして「山田野の昔を語る」という文集が作られたこともある。学校はときに記憶を収集する場となった。そして現在は人々の記憶をつなぎとめ、喚起する場として機能している。学校が閉校した後も、「地域コミュニティの中心」としての意味は維持され続けているのである。

5. 記憶の継承と展開

戦後開拓の経験は、家族単位で親と子との間で共有されるとともに、かつての学校を媒介として、地域の第一世代、第二世代、さらには第三世代以降にまで共有されている。戦後開拓そのものは、ひとつの「歴史」としての姿を持っているが、山田野では蓄積された記憶を広げるような取り組みもなされている。そうした実践の場となっているのが山田野集会所である。

(1) 山田野集会所から

山田野では、1960年代に婦人ホームが造られ、ここが地域の集会所としての役割を担ってきた。しかし2002年に山田野分校が閉校したことにともない、校舎を集会所に転用した。以来ここは地域住民のための場所であるとともに、新たに始められたグリーンツーリズムの拠点ともなっている。「やまだのアグリ mam」を立ち上げ、以来毎年3月の味噌作りを13年続けてきたG氏は、設立のきっかけを次のように語っている。

やっぱり分校でしょうね。味噌作りそのものは前々からずっとやっていて、自分たちが食べるものは自分たちが作ってきたということはあるんですけども、子どもたちなり何なりにそういうのは伝えていかなきゃいけないという思いがありましたね。私たちは味噌汁は毎日食べるもの、味噌は毎日口にするものということなので、いわゆる添加物のないもの。もともと大豆を使ってこの辺で味噌は自給のために作られていたんです。そこに分校がなくなってみんなが集まる場所もなくなる、地域の交流も含めてあれを立ち上げないかという、最後の卒業生の親の方から声がかかって、みんながそこに賛同してグループができたという

ことなんです。

ここでG氏が「やまだのアグリ mam」の原点を分校として挙げているのは、先にもみたような学校を基盤とした人々とのつながりが大きいようだ。

まず、春は運動会ですよ。夏はキャンプみたいなことをやります。それこそ弘前大学の学生さんたちもいらして、ここで自分たちが勉強を兼ねて、それに子どもたちが参加するという形のキャンプですね。秋というのは特にない。冬、学芸会があって、卒業式があって。私たち父兄は、当時は子どもたちと一緒に、自分たちの仕事を、親たちが先生になって、先生というほどでもないですけど、自分たちのことを少し子どもたちに話したりということはしましたね。おじいちゃん、おばあちゃんとのふれあいの日もありました。今でいう祖父母参観みたいなのもありました。

「やまだのアグリ mam」の活動は、祖父母世代から子ども世代までが広く交流していた学校のあり方を踏襲している。G氏が新たに始めた木酢染めや藍の生葉染めは、第一世代のA氏とともに取り組んでいるものである。第一世代からの食や生活に関する知恵が第二世代に受け継がれるとともに、グリーンツーリズムという形で発信されている。ここでは単に記憶が継承されるだけではなく、さらに展開されようとしている。

（２）山田野に住むということ

女性たちにとって、戦後開拓地としての山田野に住むというのはどういうことであつたのだろうか。子どもたちが独立し、山田野を離れた後も引き続き山田野に住み続ける理由を、対象者は次のように語っている。

①A氏

（娘の住む）仙台に行ってもさ、犬が吠えれば吠えたって文句が来るし、猫が来たつていけばまた文句が来る。いやいや、山田野が一番いいやと思って。どこ歩いてても岩木山をみながら暮らすほうが、どれだけいいかわからないと思った。山田野は私のこの体格に気持ちにぴったり合ってるんだべよ。

②G氏

私は、木造の町中に育って、サラリーマン世帯に育って、ここに来て、私は外の景色ひとつみても感動するタイプで、春にキツツキが木をトントントンと叩く音、それを見ても、子どもたちに「見て。キツツキ叩いてるよ」といっても、子どもたちは、「ああ、んだな」みたいな感じなんですけど、私はそういうことすらすごいと思うんですよ。自分が小さいときに感じていない部分をここに来て感じているという。ですから、山田野に嫁いでもごくよかったなと今は思ってます。

こうした風景、とりわけ自然のなかに気持ちの安らぎや感動を覚えるということが理由のひとつである。もうひとつの理由は人と人とのつながりである。

③C氏

遠くの親戚より近くの他人。それを地で行ってる。うちの向かいに果物をいっぱい作ってる農家があるの。何ができて持ってきてくれて、一番最初にもらって食べてる。今度、キュウリだのできれば、「あるが？」つていけば「ない」つて。わ（私）が持つていく。

④D氏

人数が少ないなかでやっていくには、我を出さないことも大事な。そして、みんな苦労しているからだと思いますよ。並みの苦労じゃない苦労をみんなしてきているから、大抵のことは我慢し合いながらというのが仲よしのコツかしらね。何たって人数が少ないからね。

ここで語られている苦労とは、もちろん開拓の苦労を指す。何もない、兵隊が走り回った原野を開墾してやっところまで到達したという経緯が、「我慢し合う」という部分を形作っている。そうした経験は、第二世代にとっては次のように捉えられている。

⑤G氏

生活の知恵つていうか、こんなふうにして集まるでしょ。そうすれば、若い私でも聞けるわけですよ、知恵を。いろんなものを学べるわけです。そうすると、やっぱり集まったかがあるというかね。そこでいろんな話が聞けるし、それをこうだったよというのを子どもにも伝えられる。今は

離れてますけれども、お嫁に行った娘とか子どもにも伝えられるという部分もあったりして、母さん（第一世代）たちと一緒に何かあれば集まりたいという気はありますね。

先に触れたように、かつては100戸の開拓農家で構成されていた山田野地区は、現在は当時のほぼ3割にまで戸数が減少している。第二世代から第三世代への移行ということを考えたとき、その数はより少ないものになるだろう。それでも第一世代や第二世代の対象者には、山田野に住み続けることに対する強いこだわりが感じられる。それは全国各地の農村集落に共通するものであるかもしれない。しかしそうしたこだわりを支え続ける何ものかが山田野にはあると感じられる。

おわりに

本稿の分析対象である戦後開拓地は、それぞれの入植者の属性から、自然村とは異なった原理で構成される新たな地域社会であった。聞き取りのなかで語られることはなかったものの、そこではいくつかの対立や葛藤があったのも事実である²⁴。また1960年代には開拓者が農業に見切りをつけ、自衛隊誘致の陳情に動くといったこともあった²⁵。その後も自然離農や助成離農制度によって離農者は増加した²⁶。

こうした戦後の社会変動のなかで、戦後開拓地が存続していくためには、「人数が少ないなかでやっていく」ことを必然的に考えなければならなかったのかもしれない。しかし山田野には単に必要から生じた共同性とは異なるものがあるように感じられる。そうした共同性を支える要素と、共同性そのもののあり方を探ることが本稿の課題であった。ごく限られた事例からではあるが、ここからは以下のような特徴がみえてくる。

第一に、山田野の女性たちの中には、世代を越えて開拓の記憶が共有されていることが挙げられる。その際に第二世代において重要な意味をもっているのは、幼少時にみた第一世代の姿である。つまり開拓の歴史は、第一世代・第二世代において時間差こそともなっているものの、ある程度共通のものとして経験されている²⁷。そのために地域の集まりや活動なども世代が交わる形で行われることが多い。そうした場が開拓の記憶の共有に果たした役割は大きい。加えて山田野には開拓の記憶の共有を可能にしているもうひとつの要

素がある。それは身近なところにかつてここが陸軍演習場であったことを偲ぶ事物が残っていることである²⁸。畑の土から掘り出される砲弾や銃弾、旧兵舎の建物の資材を転用して造られた作業小屋（以前には住居の資材にもなった²⁹）があり、これらが開拓当時の記憶を喚起する材料となっている。旧満州開拓団を母体とするような集団入植や、母村からの分村入植とは異なり、それぞれ異なった背景をもつ人々からなる山田野開拓地においては、演習場の名残が一種のシンボルとなって共有されている。

第二に、山田野の女性たちは、男性たちとは異なる形で自らの共同性を作り上げていった、ということである³⁰。男性の場合には、農業生産のための協同組合といった、制度化された共同性のもとでまとまりが作られていった。また、開拓地での生産を展開するうえでは、しばしばリーダーシップの重要性が指摘されるが、地域全体のリーダーの存在は措くとして、女性たちの集まりにおいては男性たちのそれにみられるような明確なリーダーシップといったものはほとんど認めることができなかった³¹。第一世代が蓄積した知恵を活かした新たな取り組みが、第二世代によって進められていることからわかるように、世代による序列といったものも感じられない。もちろんこのような関係性が当初からあったとも考えにくい。それは時間をかけて醸成されたとみるのが妥当だろう。その際に重要な役割を果たしたのが、共同性の場であった。

第三に、開拓地の記憶や経験を共有する場として、学校が果たした役割の大きさが挙げられる。地域の人々の切なる願いをかなえる形で開校した山田野分校は、教育や様々なイベントの場となることで、子どもから大人までを含めた地域全体の共通体験を生み出す場となった。学校を舞台とした共通の経験は、第一世代の人々の多様性をある程度捨象することにもなったと考えられる。つまり学校は、人々の語らいの場として記憶を集積する場であるとともに、新たな地域の記憶を生み出す場でもあった。そして今日においてもなお、山田野分校の記憶は、山田野地区そのものの記憶と重なり合う形で、地域に根づいている。山田野分校は、子どもを教育するという機能を喪失した後も、学校が地域社会に対して持っていた機能を保ち続けている。それは集会所としての語らいの場として、またそこに立ち寄れば往時の記憶を蘇らせることができる場としてあり続けている。しかも山田野集会所は、地域のなかで蓄積されてきたものを次世代へと伝達する拠点として活かされようとしている。その意味では、依

然として学校であり続けているともいえる。

山田野開拓地は、ひとつの制度化された地域としては、開拓農協の解散（1974年）をもって終焉した。しかしその後もこの土地を特徴づける地域性と共同性は、別の形で維持されてきた。それは入植第一世代の記憶の共有と継承によって、そして共有と継承の場としての学校の存在によって支えられてきたものであった。このような地域性や共同性は、女性によって担われてきたところが大きいのではないか。

多くの戦後開拓地、いや、一般の農村集落と同様に、山田野開拓地においても世代間の継承の見通しは決して明るくはない。調査時点ではっきりと後継者が決まっているのは7名の対象者のうち1名しかいない。生業の継承とともに、地域に蓄積されてきた記憶や場の継承もまた、大きな課題となる。そうしたなかで、場を活かしながら、記憶を内から外へと展開させる取り組みは、新たな継承の可能性を開くと考えられる。

註

- 1 蘭信三「満州開拓団を母体とする戦後開拓集落における「共同性」—熊本県東陽開拓農協の事例—」『ソシオロジ』第33巻1号、1988年、P.116。
- 2 同上。
- 3 同上論文、P.118。
- 4 同上。
- 5 原田由起乃「戦後開拓地における集団の組織化と変容—岩手県松尾村前森山集団農場を事例として—」『人文地理』第50巻2号、1998年、北崎幸之助「戦後開拓地の変容過程におけるアクターの果たした役割—茨城県南部大八洲開拓農業協同組合地区を例として—」『地理学評論』第75巻4号、2002年（のちに同『戦後開拓と加藤完治—持続可能な農業の源流—』農林統計出版、2009年に所収）、三好豊「戦後高冷地におけるリーダーのライフ・ヒストリーの分析—戦後開拓への諸契機の解明—」『農業史研究』第42号、2008年。
- 6 高瀬雅弘「戦後開拓地のライフヒストリー（２）—岩手上郷分村開拓における若者たちの職業経歴の再構築過程—」『弘前大学教育学部紀要』第107号、2012年。
- 7 比較的長期の時間軸を設定し、地域社会の変容や継承のあり方を分析した研究として、大竹晴佳「野原地区における開拓の展開—戦後開拓の30年とその後をめぐる一考察—」『新見公立短期大学紀要』第29巻2号、2009年がある。
- 8 松下里織「開拓と女性」森武磨編『戦後開拓—長野県下伊那郡増野原— オールヒストリーからのアプローチ』神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科、

2013年所収。

- 9 高瀬雅弘「戦後開拓地のライフヒストリー（３）—岩手上郷分村における「開拓二世」の女性たちのライフコース」『弘前大学教育学部紀要』第111号、2014年。
- 10 伊藤淳史「農村青年対策としての青年隊組織—食糧増産隊・産業開発青年隊・青年海外協力隊—」『経済史研究』第9号、2005年。
- 11 食糧増産隊は、1943年の拡充の際、甲種（一四〜一九歳の男子、農家のあとつぎ、中央編成）と乙種（農業にとどむべき国民学校修了の男女少年、市町村で編成）とに分けられた。
- 12 石原治良『農事訓練と隊組織による食糧増産』農業技術協会、1949年、P.172、PP.180-182。
- 13 木山きよし「山田野の思い出」青森・子どもと教師の文学の会編『ぼくたち町の少年団』ポプラ社、1981年、P.50。
- 14 「山田野へ増産の鋤」『東奥日報』1945年9月4日付。
- 15 青森県農林部農地調整課『青森県戦後開拓史』、1976年、P.388。
- 16 「既に五百戸婦農」『東奥日報』1945年12月29日付。
- 17 農林省開拓局指導部入植課編『緊急開拓事業集団開拓地入植状況概括』農林省開拓局指導部入植課、1948年、P.2。
- 18 農林省開拓局指導部入植課編『緊急開拓事業集団開拓地入植状況調査』農林省開拓局指導部入植課、1949年、P.54。
- 19 高瀬雅弘「戦後開拓地のライフヒストリー（１）—青森県鯉ヶ沢町山田野地区における『緊急開拓』の事例—」『弘前大学教育学部紀要』第105号、2011年を参照。
- 20 この点については筆者が以前調査した、第一世代・第二世代がそれぞれほぼ同年代の女性たちによって構成されている岩手上郷分村とは性格を異にしているといえる（高瀬、前掲「戦後開拓地のライフヒストリー（３）」を参照）。
- 21 青森県農林部農地調整課、前掲書、P.388。
- 22 その後1963年に5年生まで収容、翌64年に6年生までの収容が実現する（鯉ヶ沢町史編さん委員会編『鯉ヶ沢町史』第三巻、鯉ヶ沢町、1984年、P.358）。
- 23 山田野分校で実践された個性的な教育内容については、別途稿をあらためて考察したい。
- 24 元軍人たちが開拓を主導した山田野では、農業の素人である元軍人たちの失敗が冷ややかな目でみられることもあった（高瀬、前掲「戦後開拓地のライフヒストリー（１）」を参照）。
- 25 結果的に自衛隊は弘前市に設置が決まり、誘致は実現しなかった（青森県農林部農地調整課、前掲書、P.391）。
- 26 1976年の時点で、山田野の現住戸数は46戸であり、すでに当初の半分以下になっていた（青森県農林部農地

調整課、前掲書、P.754)。

- ²⁷ この点は、調査当時の事情や聞き取りを行った対象者にもよるが、第二世代の多くが開拓地以外の土地から嫁ぎ、第一世代と第二世代との間はかなり明確な「世代差」が意識されていた岩手上郷分村とは性格を異にしているように思われる。もっとも第二世代の第一世代に対する深い敬意はいずれの対象地にも共通している(高瀬、前掲「戦後開拓地のライフヒストリー(3)」を参照)。
- ²⁸ これらの詳細については、稲垣森太「遺構・遺物からみた軍隊生活」高瀬雅弘編『山田野一陸軍演習場・演習廠舎と跡地の100年一』弘前大学出版会、2014年所収を参照。
- ²⁹ 本稿の聞き取りの対象者からも、「昔の玄関が兵舎の(部材を利用したもの)だ」(E氏)、「材料を、まず配給みたいに分けて、それで家を建てたところもあったんだ」(B氏)といった話が聞かれた。
- ³⁰ ただし本稿では、出産や育児、医療や介護、さらには同居する両親との関係性など、家族に関するライフイベントについてはほとんど取り上げることができなかった。いうまでもなくこれらはジェンダーの視点においても、また地域社会について考えるうえでも重要な要素であり、今後の課題としたい。
- ³¹ もっとも、戦後開拓地には男性中心の開拓農協に対応するまとまりとして、婦人会が多く組織されたことに

は留意する必要がある。1960年代には「婦人ホーム」が設置されたことから、地域における女性の活動を促す動きがあったことが窺える。ただし聞き取りのなかでは、婦人会の活動について語られることはなかった。この点については、他の地域との比較をふまえながら、今後分析を行う予定である。

謝辞

本稿をまとめるにあたっては、山田野地区に現在もお住まいの第一世代・第二世代の方々には大変お世話になりました。なお現地での聞き取り調査は弘前大学教育学部社会調査実習「地域生活調査実習」および「公民演習Ⅰ・Ⅱ」の一環として行われ、参加した学生諸君の協力も大きなものでした。また、調査実施後に亡くなられたA氏・B氏には、ここに深い感謝と哀悼の意を表します。

附記

本稿は、平成26年度日本学術振興会科学研究費補助金(若手研究(B)課題番号24730410)による研究成果の一部である。

(2015.1.15 受理)